HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	直示と参照から見直す日本語「時副詞」の用法
Author(s)	山下, 好孝
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 32, 81-90
Issue Date	2021-04-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82418
Type	departmental bulletin paper
File Information	07_yamashita.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Jimcts

直示と参照から見直す日本語「時副詞」の用法

北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部　教授
山下　好孝

abstract

Analysis of Particle NI Attached to Temporal Expressions from Deictic and Contextual Points of View

YAMASHITA Yoshitaka

In Japanese, the particle NI is generally appended to a noun indicating the time of occurrence of an action. But some time expressions do not occur with NI. In this article we propose two types of temporal expressions, deictic and contextual, in order to explain co-occurrence with NI

Deictic time expressions are nouns like the following:

1) KYOO (today), KINOO (yesterday), ASHITA (tomorrow), RAIGETSU (next month) etc.

Contextual time expressions are nouns like the following which require reference points:

2) 6-JI (6 o'clock), 3-GATSU (March), 2020-NEN (2020) etc.

The following expressions are included as contextual time expressions because they suggest reference points:

3) GETSUYOOBI (Monday), TANJOOBI (birthday), HARU (Spring) etc.

We argue that only contextual time expressions can be followed by NI, and that deictic time expressions are also considered as contextual in contrastive environments:

4) ASHITA-NI-WA , ASHITA-NI-MO (even tomorrow).

Deictic time expressions can also be considered as contextual when they are placed in a schedule:

5) RAIGETSU-NI (in the next month).

Finally we compare time expressions in Japanese and Portuguese to support the distinction of these two types of expressions.

1 日本語の「時副詞」

日本語の副詞には「状態副詞」「程度副詞」「陳述副詞」「場所副詞」「時副詞」などがある。そのうち事態がいつ起こったかを表す「時副詞」は日本語教育でも初期の段階から導入されている。

「時副詞」は助詞「に」を伴って現れる場合もあれば、伴わずに現れる場合もある。日本で多く使われている『みんなの日本語初級Ⅰ』の文法説明書では、時副詞と助詞「に」の共起について、次のように説明されている。

1）時副詞と助詞「に」の共起

N（time）に V

The particle に is appended to a noun indicating time to indicate the time of occurrence of an action

⑧　6時半に　起きます。　　I get up at six-thirty.

⑨　7月2日に　日本へ　来ました。　　I came to Japan on the second of July.

［Note 1］に is not used with the following kinds of noun expressing time:

きょう、あした、あさって、きのう、おととい、けさ、こんばん、いま、まいあさ、まいばん、まいにち、せんしゅう、こんしゅう、らいしゅう、いつ、せんげつ、こんげつ、らいげつ、ことし、らいねん、きょねん、etc.

⑩　きのう、勉強しました。　　I studied yesterday.

［Note 2］With the following nouns, the use of に is optional:

～ようび、あさ、ひる、ばん、よる

⑪　日曜日［に］奈良へ　行きます。　　I'm going to Nara on Sunday.

『みんなの日本語初級Ⅰ第2版、翻訳・文法解説、英語版』p32-33

この説明によると、時副詞は基本的に助詞「に」を伴う。しかし「今日、明日、明後日」等の時副詞には「に」はつかない。さらに曜日などには「に」がつく場合と、つかない場合があるというふうに理解出来る。

本研究ノートは、この時副詞と助詞「に」の共起関係について、直示と参照の観点から再検討を試みるものである。上記の説明では不十分であることを示し、「時副詞」と助詞「に」の共起について包括的な説明を目指す。

2 直示と参照

本研究ノートで使用している「直示」と「参照」の概念について最初に説

山下 好孝 YAMASHITA Yoshitaka

明しておく。

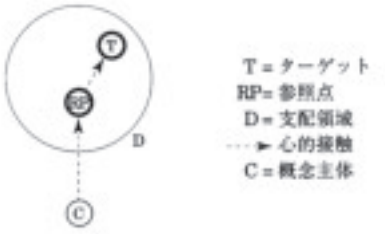
Cambridge dictionary（ウェブ版）によると直示 deixisは次のように説明されている。

2）deixis
the use of a word or phrase whose meaning depends on who is talking, who they are talking to, where they are, etc., for example “me”, “here”, or “yesterday”

この研究ノートでは直示の定義をさらに狭め、「話者（わたし）」の「発話時点（現在）」の「発話した場所（ここ）」を基準として、発話者が他に何も介在せず、直接アクセスできる情報を直示的な情報とする。

それに対して、「参照的（contextual）表現」となるものは、何らかの参照点（reference point）を介してアクセス出来るターゲットとなる情報と定義する。認知言語学の先行文献の助けを借りると、以下のような図で表現されるものである。

3）参照点と参照表現



辻編（2013：132）

したがって「場面内指示」の語であっても、「指さし」などを介してアクセスされる情報は直示とは見なさない。「指さし」が一種の参照点を示すと考えるからである。また「聞き手」の領域にあるものを指す「それ」も、「聞き手」という参照点を持つことから直示表現ではないとする。

一方、参照表現の参照点となるものは山下（2016a）、（2016b）、（2017）、（2020）などで詳述した。これらの分析に基づいて、以下の節では時副詞と助詞「に」の共起関係について考察する。

3 直示的時副詞

さて、本研究ノートの第一節で挙げられた、助詞「に」のつかない時副詞をもう一度整理してみる。

4)「に」のつかない時副詞
今日、明日、明後日、昨日、一昨日
今朝、今晩、今、先週、今週、来週
先月、今月、来月、今年、来年、去年

これらの表現は「話者」の「今」を基準とした時の表現である。したがって直示的な表現と見なすことができる。また時間の経過とともに表現が変わるものでもある。例えば「今日」は、「明日」になると「昨日」となり、「明後日」になると「一昨日」に変わる。その意味で話者がどの時点で表現するかによって表現の仕方が変わる「相対的な時間」とも考えることができる。これらは「私」「ここ」「いま」以外の基準点、つまり参照点を持たない。参照点を持たない直示表現としての時副詞には、助詞「に」はつかない。
次に、取り上げるのは以下の時副詞である。

5）毎朝、毎日、毎週；いつ

これらの表現も、基準点つまり参照点を設定することはできない。また過去時制とも、現在時制とも未来時制とも共起する。このような特性は上で述べた相対的な時副詞にはない特徴である。

6）毎朝、ジョギングした。
7）毎朝、ジョギングしている。
8）毎朝、ジョギングするつもりだ。

以上のことから、参照点をもたない時副詞には、助詞「に」は付加しないということが結論づけられる。
では、本研究ノート第1節であげられていた、「に」がつくかつかないかは任意であるとされる時副詞はどうだろうか。

9)「に」がつくことが任意である時副詞
～曜日、朝、昼、晩、夜

第1節の説明では「数字」がつく時副詞では「に」をつけるとある。しかし、そのような時副詞でも「に」は必ずしもつける必要はない。

10）1945年8月15日、長かった戦争がが終わった。

次の節では、これらの時副詞と「に」の共起について考察する。

山下 好孝 YAMASHITA Yoshitaka

4 参照的時副詞

この節では助詞「に」と共起する時副詞について取り上げる。前節の結論からも分かるように参照点を持つ時副詞は助詞「に」と共起する。ではどのような場合に参照点が設定されるかについて順次見ていく。

4-1 数字を含む時副詞

11）私は1956年に生まれた。

ここで使われている「1956年」という時副詞はもちろん西暦に準拠したものである。西暦は「イエス・キリストの誕生」を基準としてしていると言われており、その時点を基準とする参照点を持つ表現である。参照点を持つ時副詞は「絶対的な時」を表し、それには「に」をつけることができる。もちろん、前節の最後に述べたように、やや固い文体では「に」をつけないこともある。

数字を含む時副詞は、たとえそれが「相対的な時」を表しても「に」と共起する。

12）先月の25日に孫が生まれた。

「先月」は直示表現だが、「25日」には明らかにカレンダーに準拠した参照表現である。このように基準点を参照点とする副詞には「に」をつけることができる。

13）「に」のつく順序副詞
　第一に、次に、最後に

これらの順序の副詞にも「に」はつくし、動作の結果、最終的な状態を表す副詞にも「に」がつく。これは動作の過程における状態を表す副詞と対照的である。後者には「に」をつけることができない。

14）電気がピカピカ光っている。
15）掃除したら、机がピカピカになった。

助詞「に」が方向を示す場所と共起する際には、別の助詞「へ」と置き換えられることが多い。しかし、方向を表す「に」が着点を含意する場合には「へ」よりも好まれる傾向がある。

16）6時に家へ帰る。⇒　会社を出るのが6時
17）6時に家に帰る。⇒　自宅に到着するのが6時

このように考えてみると、助詞「に」は時間的にもある時点に到達したことを示すと考えられる。到達点を明示するには、なんらかの目盛りや尺度が必要となる。この点、時副詞と場所名詞に後節する「に」には共通点が見られる。

今までの議論で、数字を含む時副詞は参照表現であり、「に」がつくことが分かった。では「曜日」はどうだろうか。

現在日本では曜日には天体を語源とする語彙が使われている。しかし、中国語やポルトガル語では曜日に数字がついている。

18）星期一、星期二、星期三
19）segunda feira, terça feira, quarta feira

実は日本語の曜日を表す語彙も、数字である可能性がある。

漢字「何」には種類を表す場合と、数量を表す場合に、読み方に違いが出る。

20）彼は何人（なにじん）ですか？　―　ブラジル人です。
21）学生は何人（なんにん）ですか？　―　8人です。

では曜日の読み方はどうだろうか。

22）今日は何曜日（なんようび）ですか？　―　月曜日です。

もちろん漢字「何」は音声的な環境によって「なに」から「なん」になる場合もある。後ろに「t, d, n」で始まる語彙がつくと「なに」は「なん」に変わる。

23）何ですか？
24）何と言いましたか？
25）何の本ですか？

しかし曜日の場合はこのような音声環境には当てはまらない。それにも関わらず「なん」と読むのは順番である数字と見なされている可能性があるからである。

曜日の言い方に関しては、以上のように「数字」がついている見方もあれば、次の節で述べるような特性から助詞「に」がつくと考えることも可能である。次の節ではこの別の観点を考察する。

4-2　全体を参照点準とする時副詞

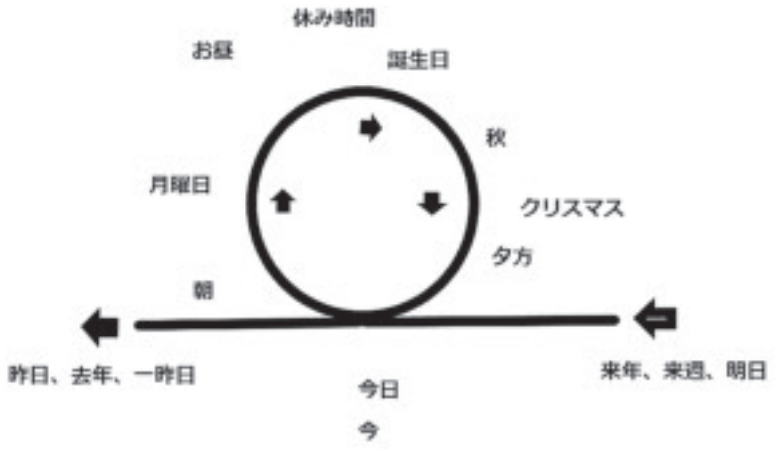
曜日を表す時副詞に関しては、別の見方もある。

時間の流れを考察すると「過ぎ去る時間」と「回転する時間」の二つを区

山下　好孝
YAMASHITA Yoshitaka

別することができる。

26）過ぎ去る時間と回転する時間



曜日は一週間を全体として繰り返される時間である。「春、夏、秋、冬」は一年を全体として繰り返される。「誕生日、クリスマス、創立記念日」なども一年を全体とした繰り返される「回転する時間」示す。つまりこれらは全体を参照点とする参照表現なのである。それに対して、前節で示した直示的な時間はすべて「過ぎ去る時間」と考えることができる。

全体を参照点とする時副詞は参照表現であり、助詞「に」と共起する。なお、全体が参照点になる他の例は山下（2016b）、（2020）を参照していただきたい。

4-3　対比が参照点となる時副詞

助詞「は」は「主題 topic」と「対比 contrast」を表すとされる。山下（2020）では主題を示すためには何らかの参照点が必要であることを示した。また対比の場合は、対比されるもの動詞で相互に参照しあうという特性がある。その意味で、対比表現も参照点を持つ参照表現であると解釈できる。

第1節で述べた「相対的な時」をあらわす時副詞も、対比的なコンテクストの中では、助詞「に」と共起する場合がある。

27）荷物は　昨日には　着いているだろう。
28）明日にも　いい知らせが　もたらせるはずだ。

取り立て助詞とされる「は」や「も」がつくと、他の名詞との関係が示唆される。そのため、これらの助詞がつくと参照表現として解釈される。よって助詞「に」との共起が可能になるのであろう。

4-4　リストが参照点となる時副詞

第一節で述べた相対的な時制を表す時副詞も、スケジュールや予定表を示唆する文脈の中では助詞「に」を伴って表現されることがある。

29）安倍首相、来月に訪中
30）大型台風、明日に九州上陸

これらは一連の予定表の中で、どの段階に事態があるかを表していると考えられる。スケジュールや予定表は「全体集合」として、表現の参照点となる。

全体を参照点とする表現は副詞「だけ」を用いた表現に観察される。

31）昨日は、次郎と三郎だけ来た。
32）昨日は、次郎と三郎しか来なかった。

上の31）の文はグループ全体を前提としなければ解釈できない。つまり全体を参照点として表現しているのである。一方、その次の32）は、数の少ないことを話者の主観として表現している。たとえグループが他に「太郎」を含む三人のグループであったとしても、話者が少ないと判断すれば発話可能となる。

このようにある集合の全体を参照点とする表現はさまざまな場面で観察される。これらは参照点を持たない直示表現と振る舞いがことなるのである。

以上、参照点をもたない直示的表現の時副詞も、参照点を想定できる環境に入れると、助詞「に」と共起できることを述べた。

5 終わりに

本研究ノートでは日本語の時副詞を直示的なものと参照的なものに分類し、助詞「に」との共起関係ついて考察してきた。直示的な時副詞も、参照的な文脈が与えられると「に」を伴うことを観察した。このような特徴は日本語に独特のものなのだろうか。

ポルトガル語でも時副詞に前置詞「em, a」が伴う場合と、伴わない場合がある。兼安（2005）では以下のように説明している。

33）日付と前置詞EMの用法
日付の表現には原則として前置詞“EM”を用いる。
例：O natal é no (em＋o) dia 25 de dezembro.
→　クリスマスは12月25日です。
O Dia das Mães é no (em＋o) 2° domingo de maio.
→　母の日は5月の第2日曜日です。
O meu aniversário é nesta (em＋esta) segunda-feira.
→　私の誕生日は今度の月曜日です。
例外）（一昨日）“anteontem”（昨日）“ontem”（今日）“hoje”（明日）
“amanhã”（明後日）depois de amanhã.

山下 好孝
YAMASHITA Yoshitaka

左記（上記）の副詞を伴った表現では、前置詞“EM”を用いない。
O Natal é hoje. → クリスマスは今日です。
O Dia das Mães é amanhã. → 母の日は明日です。
O meu aniversário é depois de amanhã. → 私の誕生日は明後日です。
兼安（2005） p.37

また「行動の時刻」を表すときは前置詞「a」を用いると説明している。

34）時刻と前置詞Aの用法
A que horas você estuda? あなたは何時に勉強しますか？
acorda? あなたは何時に起きますか？

Eu estudo	à meia-note	零時	に	勉強します。
acordo	à uma hora	1時		起きます。
	às duas e meia	2時半		
	ao meio-dia	正午		

（注釈） 前置詞と 冠詞の 結合
a＋a＝à
a＋o＝ao
a＋as＝às
a＋os＝aos
兼安（2005） p.64

このようにポルトガル語でも直示的な時副詞は前置詞なしで用いられ、参照的な時副詞には前置詞がつく。日本語と同様の現象が見られ、非常に興味深い。

以上のように考えると「直示的な捉え方」と「参照的な捉え方」は日本語のみならず、他の言語でも有効な概念であると考えられる。様々な言語現象を説明するのにこの二つの見方を今後応用して行こうと考えている。

参考文献

兼安シルビア典子（2005）『ブラジル人による生きたブラジルポルトガル語初級』、同学社
スリーエーネットワーク編（2012）『みんなの日本語初級Ⅰ第2版、翻訳･文法解説、英語版』
辻幸夫編（2013）『新編認知言語学キーワード事典』研究社
山下好孝（2016a）「直示と参照に基づく日本語指示詞の再検討」、『国際広報メディア・観光学ジャーナル』23巻、pp51-62 http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/62975
山下好孝（2016b）「直示と参照に基づく「だけ」と「しか～ない」の意味解釈」、『北海道大学国際教育研究センター紀要』20巻、pp93-102 https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/65698
山下好孝（2017）「直示と参照に基づく「前（まえ）」と「後（あと）」の意味分析」、『国際広報メディア・観光学ジャーナル』26巻、pp141-152 https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/68748
山下好孝（2020）「直示と参照に基づく日本語助詞「は」と「が」の考察」『国際広報メディア･

観光学ジャーナル』30巻、pp91-103　https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/77571

（令和2年11月6日受理、令和3年1月7日採択）

山下　好孝　YAMASHITA Yoshitaka